





「ふう……これで48体目……ちよつと多いかな……」



今回、マイゴハンター
アイシャ・エプタが請け負った任務は

下級マイゴ討伐任務であった。

下級マイゴは群れる習性がある為、
任務中は数々のマイゴを
かき回すのが面倒な問題は無く
相手がしなやかな力なら問題は
アサシンの実力は仲間もいるの
簡単にも今回は仲間もいるのだ
簡単な任務といえるものだ。



その任務の最中、
そのマゴが廃屋の中に逃げ込み
それを追いかけたアイシヤは
室内に隠し扉の様なものを見つけ
る。

中に入ってみると、
中には数多くの下級マーゴがおり、

アイシヤの侵入に気づいた
マーゴはアイシヤに襲い掛かってきた。

しかし下級マーゴではなかつたので
アイシヤの敵ではなかつた。東になつた所で



「ん〜でもこのくらいじゃあ歯ごたえ無いかな……
それより出口を見つけないと……」



襲い掛かってくるマールゴを5、6体屠った辺りだろうか、仲間との合流を考えたアインシヤは入ってきた扉から戻ろうとしたのだが、

扉自体が消滅していた。しかも通信も遮断されていた。というおまけ付きである。

「多分こういう仕掛けが出来るってことは、奥に上級マールゴがいるよね。」

上級マールゴとは、下級マールゴがエネルギーを喰らい続け成長する事によって生まれ出る個体で、強力な特殊能力を持つものが多い。マールゴハンターにとっても油断する事の出来ない強敵である。

「多分そいつを倒せば出られるだろうけど……、よしー気合入れていく……」



『それ以上はやめてもらえるかしら?』







「...」

「残念、そう簡単に解ける程ヤワな術じゃないのよ」

「...」

「っあー!、やめろ、なんで、こんな…」

「ん?なんで腋なんかつて事?んふふ。
アナタ、ここが弱いんでしょう?」

「そんな…こと、んあ!♡」



「そんな…ごどろんあう!♡」

「ほら、こんなに敏感、それに美味しいエネルギー!。まあ、私はそっちには必要以上の興味はないのだけれど…」

どつちにしても下ごしらえは大事よね。さあ、気持ちよくしてあげるから、早く素直になって私にアナタの美味しいものを頂戴。」



「…誰…が、あつはな、せ…んこ♡らっ♡…」

「念入りにやったつもりだったけど、アナタって随分強いよね。このままじゃ、本当に拘束を破りそうね。」

「ふふっ、それは困るからアナタにはもっと気持ちいい事に素直になってもらおうかしらっ！」



「……んくう……あ……」

「ふふふ……どうかしら？、頭の中が気持ちよくて何も考えられないでしょ？
さつきも同じ事をしたんだけど、これをやってる最中は記憶なども消えちゃうのよね。
思考を読み取る副作用かしらね？
だからアナタにとっでは訳も分からず捕まったように感じたでしょうけど
そんな事なかったのよ？……あら？」





シエニヤの精神攻撃に翻弄されたアイシヤは
何度も強烈な絶頂を味わわされ
無力化された後、
シエニヤの自室に連行された。

そこでアイシヤは椅子の様な形をした、
シエニヤの言う所の器に座らされた、
肢体を弄ばされていた――



マインドドレイン

それはごく一部のマーゴにみられる特殊な嗜好で、人間の精神エネルギー（カ）を喰らう行為である。

本来生物のエネルギーを栄養として無いたるマーゴにとって精神エネルギーの価値はほとんど無い。

しかもこのエネルギーは人間のみ存在するもので、更にその味とエネルギー認識でマールゴもごく少数といわれている。

「う……あたまから、すわれると
……きもち……よすぎ……て……」

「やだやだ」

「……すぐに、いっちゃって
……おりに、こられない……の……」

「頭からだけじゃあ……ないでしょ？、
もっと気持ちいい吸い方もあったでしょ？
どことどこから同時に吸われるのが一番よかった？」



「シエニヤ様……！」

「……あら？何かしら？」

入ってきたのはシエニヤの部下マーゴだった。

「外にいるマーゴハンターがシエニヤ様の結界を破壊し始めました、」
「？、そんなわけじゃないじゃない、私の結界は中に入ったら位置や方向の感覚が狂うのよ？だから結界の核も分らず彷徨い続けるようになってるのよ。」

「それが、マーゴハンターの1人に飛行能力を持つ者がおり、その者が上空の結界の範囲外から攻撃し、内部に侵入した者と一緒に攻撃すること、核が崩壊しはじめており、もう限界です！、後5分もすればここにも奴らがやってきます！」

と、切迫した様子で部下マーゴが現在の状況を報告する。

「ふん、成程ね、そういう手があるのかあ、まあクラス5のお仲間ですものね、1時間くらいで私の結界をねえ……やるわね。」

……ところであなた？」

「はい、」支持……を、つつ……ぐ……え……」

何かを潰したような音がしたかと思うと、
胸のコア部分を抉り抜いていた。回から侵入し





「如何なる理由であつても私の食事中は部屋の扉を開けてはならない、そう教育したはずだけど？」

そう忠告した所で絶命した部下が動くことも返事をする事も無い。死体を放った部下が動くことも返事をする事も無い。

「はあ、まつたく……、次はもうちよつとマシな部下を作らないとね、ロイヤルガードみたいなのもいいわねさて。」

シエニヤは部屋にあるボタンを押す、すると先程とは違う下級マーゴが部屋にやってくる。

「シエニヤ様、どうされましたか？」

「今マーゴハンターが侵入してるのよね。」

「はい、結界は崩壊し、防衛しております。」

「そう……じゃあ、私が逃げる時間を稼ぐ為に、全員で死んできて頂戴。」

「え？、それはどういっ……」

理不尽な命令に困惑する部下マーゴがシエニヤの方も見ると、シエニヤの頭部の装飾が開き、アイシヤすら陥落させた光が明滅する。

「あなたがリーダー、

とにかく全員で戦って全員で死んできなさい、
マーゴハンターに情報を渡したくないから一人も生き残らないで、
逃げ出す奴は貴方が殺しなさい、

出来ればあなたが生き残って最後に自害するのがいいわね。」

そう言うとシエニヤの頭部の明滅のパターンがが変わる、
すると程無くしてと部下マーゴの体が膨れ上がる、
その体は筋骨隆々で
形状も明らかに正常な状態ではない位歪だった。

「これは私からプレゼンよ、

限界まであなたの体を強化したわ、長く持たないけど、
頑張つて仕事を全うしてきてね。」

「…はい…カシゴマリ…ました…。」

そう言うって強化された部下マーゴは部屋を出ていった。

「さて、これで10分くらいは持つかしらね、

まあ今回は滅多に味わえない精神力を食べられたから良しとしましょう。

エネルギーも結構確保したから
今度は前よりも質のいい部下を揃えられそうだしね。」

「アイシヤ、

貴方は最高に美味しいマーゴハンターだったわよ
機会があつたらまた味わわせて頂戴。
♡

それじゃあね」

別れを回にしながら絡めた触手を解こうとし、

。。。ゴニヤの動きが止まる。

